



GFL生から見た医学部外国人留学生との懇談会

国際交流

実施日:平成29年11月27日

実施場所:群馬大学昭和キャンパス生協食堂

発表者:医学部保健学科看護学専攻1年 今井 里咲



1. 要旨

群馬大学医学部の外国人留学生との交流を目的とした懇談会に参加した。留学生と会話をしたり、留学生の母国についての発表を聞いた。留学生との会話を通して、英語力の不足や積極性の重要さを感じた。英語力やコミュニケーションスキルの向上のためにも、外国人との交流の機会には積極的に参加するのがよいと考える。

2. 目的

医学部の留学生と交流する機会が少ない。そこで、この会を通して留学生と交流し、お互いの文化や考え方を理解するとともに、友好関係を築くため、この会に参加した。また、英語で会話することで、英語力を向上させることも目的とした。

3. 内容

①参加者

前橋市国際交流会副会長をはじめとする来賓者 9名

医学部外国人留学生 60名 →出身国 中国 韓国 スリランカ ネパール
ベトナム モンゴル インドネシア
フィリピン アメリカ タイ インド
シリア 台湾 マレーシア

チューター学生 24名

群馬大学教職員 39名

GFL学生 5名

計15カ国137名



写真1 立食会の様子

②歓談

食事をしながら、留学生と会話をした(写真1)。留学生とどんな会話をしたらよいかかわからず、自分から話しかけることができなかった。最初に話しかけてくれた留学生に「どんどん自分から話しかけに行かなければ、英語力も向上しない。ここの留学生の大半が英語を第二言語として話しているのだから君と同じだ。」と言ってくれた。次に話しかけてくれた留学生は、名札に書いてあったGFLに関心を持ったようで、GFLについて質問してくれた。私は、GFLについてうまく説明することができなかった。最後に話した留学生とは、趣味や出身地についてゆっくりではあるが英語で会話することができた。

モンゴルの留学生は、モンゴルの地理や文化について、英語で発表してくれた。民族衣装を着て、伝統的な踊りと歌を披露してくれた(写真2)。



写真2 伝統的な踊りを披露するモンゴル人留学生たち

続いてインドネシアの留学生がインドネシアの地理や文化について英語で発表し、インドネシアの有名な伝統的な歌を教えてくれた(写真3)。参加者全員でその歌を歌った。その歌にステップを入れた遊びがあり、それも披露してくれた。



写真3 母国について発表するインドネシア留学生

4. 感想および考察

① 多くの国から多くの留学生がこの群馬大学医学部に留学していることがわかった。このことから、日本の医療技術が高いものであることが考えられる。また、留学する環境として、日本が適しているのではないかと考える。

② 話しかけられずに立っただけでも何も始まらないことを痛感した。どんな英語でも、どんな話題でも自分から積極的に話しかけることがコミュニケーションをとる上で重要であることを痛感した。

GFLについて説明できなかったことから、GFLについて理解もせずに活動していたことを恥ずかしく思った。うまく説明できないでいると、留学生の方から細かく質問してくれた。その質問が聞き取れても、自分の言いたいことが英語ですんなり言えないことにもどかしさを感じた。日頃から英語を話す機会を設ける必要があるのではないかと考えた。また、英語でどう表現するのがわからなかった時に単語だけ並べて伝えたら、それを理解しようとしてくれて、そこから会話が成立した。英語でうまく伝えられなくても、自分のできる範囲で何かしら発することができれば、コミュニケーションをとることができるということを実感した。会話が成立したことがとてもうれしく思い、同時にもっと思ったことをうまく伝えられるように英語力を向上させたいと思った。そのために、授業での英語の読み書き以外に、自分の思ったことを英語で話すトレーニングが必要であると思う。このように外国の方と接することができる機会があるのなら、積極的に参加していこうと思う。そしてもし参加したのなら、自分から積極的に話しかけていこうと思う。

留学生の発表内容は、難しい内容ではなかったのだが、英語が理解できず所々しかわからなかった。相手の伝えたいことを理解するためや、文化を理解するためにも英語の聞き取りの能力が必要であると思った。英語がわからなくても、披露してくれた踊りや歌から文化を知ることができた。自分の国以外の文化を知ることがとても楽しかった。踊りや歌は現地の言葉だったのだが、その会場にいた全員と時間を共有していることを感じられた。音楽は言葉が通じなくとも、人との距離を縮めてくれると感じた。披露してくれた歌と踊りはその国で有名なものだそうで、モンゴル、インドネシアそれぞれの伝統を感じることもできた。踊っていたり、歌っていたりする留学生、皆さんがとても楽しそうにしていて、その留学生の自分の国に対する母国愛を感じることもできた。もっと詳しく聞きたかったが、英語でなんと聞いていいかわからなかったり、時間もなかったりしたため、聞くことができなかった。もう一度交流できる機会があれば、それぞれの文化について聞いてみたいと思う。

この会は、医学部の留学生だけとの懇談会であったため、もしくは昭和キャンパスでの開催であったためか、GFL生の参加が5人と少ないように感じた。私は、GFLは将来国際的にリーダーとして活躍していくための知識や経験を得ることのできるコースであると考えている。そして、日本にいて外国人と接する機会というのはとても少ない。実際に外国人と接することで、新しい知識を得たり、とてもいい影響を受けたりすることは確かであると思う。もっと多くのGFL生に参加してもらい、お互いに高めていけたら、GFLがもっとよい活動になっていくと思った。

5. 謝辞

この懇談会を企画してくださった、昭和地区事務部学務課学事・学生支援係のみなさん、GFL生を特別に参加させてくださり、本当にありがとうございました。とても貴重な経験ができました。この経験を今後のGFLの活動に生かしていきたいと思います。

重ねて、この発表のためにご指導くださった大西先生をはじめ、GFLの事務のみなさん、本当にありがとうございました。

新興国理学療法学生との研修交流プログラム

国際保健医療研修

実施日：平成29年9月17日～平成29年9月24日
 実施場所：モンゴル国立医科大学（モンゴル・ウランバートル）
 発表者：医学部 保健学科理学療法学専攻2年 山口 清美



1.概要

目的：同じ保健医療領域で学ぶ学生同士が交流することにより、開発途上国の文化・情勢を踏まえたうえで保健医療や各々の専門職種について理解する機会を設けること。また、共同研究について検討する機会を設けること

参加者：群馬大学大学院保健学研究科教員 1名
 群馬大学大学院保健学研究科博士前期課程 学生 3名
 群馬大学医学部保健学科理学療法学専攻 学生 2名

事前準備：モンゴルの医療制度についての学習、研修中の学生発表用のスライド・原稿作成

2.活動内容

日付	スケジュール
9/17	移動
9/18	モンゴル国立医科大学(MNUMS)施設見学、理学療法(PT)学科の授業参加、学部生発表(図1.図2)
9/19	第3レベル病院見学(図3) MNUMS PT学科の授業参加 院生発表
9/20	第2レベル病院見学 第1レベル病院見学 民族舞踊観劇
9/21	MNUMS PT学科10周年記念式典
9/22	学生交流(ウランバートル市内) ホームステイ
9/23	学生交流(郊外)(図4)
9/24	移動

3.感想

この研修を通して、学生からは勉強に取り組む姿勢、人に対する温かさを教わり、モンゴルの病院環境や治療の仕方を学ぶことができた。現地ではジェスチャーと英語と日本語を、その時々で最も伝わりやすいものを選択してコミュニケーションをとっていた。

医療・教育に関して日本とどうして違う部分があるのか考えていく中で、経済面の違いがあることにも気づけた。日本で当たり前になっている器具も、モンゴルでは非常に高価なものであった。当たり前を当たり前と思わないことは、今後人と関わるうえでも大事なことである。

共同研究について考察したところ、私は腰痛と環境をテーマにすると面白いのではないかと考えた。日本とモンゴルでは生活様式が少し異なる。例えばトイレは日本の和式や洋式と同じものもあるが、モンゴルのトイレはほとんどが座れず、中腰姿勢やしゃがみ込み姿勢でトイレ(図5)をすることが多い。また車に乗るときに5人乗りの乗用車に7～8人で乗ることも当たり前で、腰を曲げたり、体をひねるなど無理な姿勢をとることになる。日本では和室での生活や、一人暮らしの若者がローテーブルを使った生活の中で、横座りやあぐらなど骨盤がゆがむような姿勢をとることが多い。生活様式に違いがありながらも、どちらも腰痛の原因になるような生活であると思ったため、このテーマを考えた。

モンゴルのリハビリの現場ではリハビリ専門医師の指示が絶対で、理学療法士が患者さんとリハビリを行っていく中で感じたことや提案をリハビリ専門医師が受け入れることはない。今後モンゴルの医療現場で医師と理学療法士が密に連携できるようになり、リハビリチームだけでなく広く医療者たちがかわって一つの病気や患者さんに対して多角的に考えられるようになることを願う。その手助けが少しでもできるようになりたいと思った研修であった。



図1.学部生発表 あやとりをしている様子



図2. 授業参加
 テキストやレジュメはない
 ノートとペンのみ
 野球のピッチング動作について群大の
 学生が教えている様子



図4. 郊外にてラクダに乗る様子



図3.第3レベル病院 運動療法室
 経済的事情で治療用ベッドは手作り



図5.学生寮のトイレ

4.謝辞

今回の研修を指導・引率していただいた群馬大学大学院保健学研究科の中澤理恵先生、モンゴル国立医科大学の教職員・学生の皆様、訪問施設の職員の方々に厚く御礼を申し上げます。



英語で語る世界の医療事情講座

国際交流



実施日：平成29年10月17日、12月20日、1月23日、2月9日(全4回)
 実施場所：群馬大学医学部保健学科中央棟6番教室
 発表者：医学部保健学科看護学専攻2年 谷藤 咲

[概要]

医学部留学生との交流の機会が少なさを感じたこと、医学部GFL生の2年後期公式行事が少なかったことから、大学院保健学研究科の川島先生の協力のもとに新しく医学部GFL2年の公式行事として計画した。

目的は、国際的視野を持ち将来医療にかかわるために、医学部大学院に学ぶ留学生を通して世界の医療事情について学び、併せて英語力の向上を図ることである。月に一度、医学部留学生を招き、医学部GFL2年生と参加を希望する他学年のGFL生を対象に講演していただいた。まず30分程度、母国の医療事情と留学生自身のこれまでの経験や日本へ留学することとなった経緯、研究内容などについて話していただく。その後質疑応答や特定のテーマに沿って議論する。使用言語は英語で、講演していただく留学生を決めることから、メールでの依頼、日程調整、当日の実施まで、運営全般を学生が行った。

[各回の内容]

第1回：10月17日

Endang Nuryadiさん(インドネシア出身)

初回ということもあり、講演前に一度会って打ち合わせをすることで話していただく内容や実施場所などについて一緒に確認することが出来た。

当日は、日本での学会の話や、専門である放射線医学についての話をしてくださった。(図1)

講演の後には、皆で円になり自己紹介をしたのち、Endangさんに質問したり、逆に日本の医療制度や大学のカリキュラム、資格についてEndangさんが質問してくださったりと、お互いに情報交換をすることが出来た。(図2) 国によって資格取得までの道のりも異なることを実感した。



図1. 講演の様子



図2. 講演後の様子

第3回：1月23日

Abdallah Mshatyさん(シリア出身)

Abdallahさんと知り合ったのは2017年度グローバル交流セミナー・サマーセミナーで講演していただいたのがきっかけである。その内容にとっても衝撃を受け、もう一度お話ししていただきたいと思い、お願いした。メールにて企画の内容について伝えると、快く承諾してくださった。話していただく内容については、グローバル交流セミナー・サマーセミナーでの内容に加えて、私たちが医学部生であることから、世界の医療の状況や研究内容などについてお願いした。

当日は、パワーポイントを用いて、シリアでの学生時代の体験や、その後の外国での経験、日本に留学することとなった経緯などについて話して下さった。シリアでの過酷な経験も、つらい思いがあるにもかかわらず、写真を用いて話して下さり、今まで他人事だと思っていた部分もあったが、現実を知ることが出来た。それと同時に、つらいことがあっても乗り越えていくという強い気持ちに心を打たれた。講演後は、家族の事や英語の勉強法などについて教えて下さり、楽しくコミュニケーションをとることが出来た。



図4. 第3回講演後

第2回：12月20日

Hernando Bernal Francoさん(コロンビア出身)

大学院医学系研究科の鯉淵先生と高橋先生の協力のもと、講師をお願いすることとなった。連絡をしてから日数が少なかったにも関わらず、当日は医療のことや研究内容だけでなく、コロンビアの写真などをたくさん見せてくださり、コロンビアの魅力を話して下さった。

また、講演後には留学についての相談に乗って下さったり、将来のことなどについて共有することが出来、とても有意義な時間を過ごすことが出来た。



図3. 第2回講演後

第4回：2月9日

Gu Wen Chaoさん(中国出身)

当日は、中国での診療放射線技師としての仕事についてや、日本での学会参加の様子、研究内容について話して下さった。

Guさんは、少し日本語を話すことが出来たため、難しい言葉などは使わずに日本語でわかるように説明して下さったため、より理解を深めることが出来た。また、春節などの中国の文化などについても教えて下さり、楽しく、多くの事を学ぶことが出来た。



図5. 第4回講演後

[総括と今後への展望]

今回、新しい企画を始めるということで、要領が分からず、計画通りにならなかった部分も多くあったが、無事に4回実施することが出来た。4回それぞれの講演会当日に得るものが沢山あったのはもちろんだが、それに加え、当日までの留学生とのメールでのやり取りにより、メールでの英語の使い方を学ぶことが出来た。それと同時に、身振り手振りを使うことのできないメールという手段での英語でのやり取りの難しさを痛感した。依頼時の未熟な英語での説明にもかかわらず、とても内容の濃い講演をして下さり、沢山の事を知ることが出来た。また、講演後には質疑応答やお互いの国の医療について紹介があったりして、目的である世界の医療事情について知ることに加え、日本の医療についても改めて考えることが出来た。

計画時には10月から4ヶ月、月に一回行う予定であった。しかし実際には、依頼する留学生の決定や日程調整が上手くいかず、予定よりも大幅に遅れてしまった。留学生と交流できる貴重な機会となるため、依頼や日程調整の方法などについて改善し、ぜひこれからもこの企画を継続してほしい。

最後にこの企画は、講演して下さった4名の留学生、指導して下さった大学院保健学研究科の川島先生と大学院医学系研究科の葭田先生、諸手続きをして下さった保健学科教務係の方々、留学生を紹介して下さった大学院医学系研究科の鯉淵先生と高橋先生のおかげで実施することが出来ました。心より感謝申し上げます。



グリフィス大学留学体験

グリフィス大学海外看護研修プログラム

実施日：平成30年3月19日～平成30年3月27日
 実施場所：グリフィス大学(オーストラリア・ゴールドコースト)
 発表者：医学部 保健学科看護学専攻2年 藤谷亜実



I 概要

1) 目的

海外の医療・看護事情について学ぶとともに、学生間の交流を通じて国際的な視野をもち看護の視野を広げること

2) 概要説明

医学部保健学科看護学専攻3年(当時)3名と2年(当時)3名(図1)と教授2名の計8名でオーストラリアにあるグリフィス大学へ看護研修に行った。グリフィス大学の看護部門は世界第14位(ACADEMIC RANKING OF WORLD UNIVERSITIES)で、5つのキャンパス(ネイサン、マウントグラヴァット、サウスバンク、ローガン、ゴールドコースト)に、教育、エンジニアリング・IT、環境学・建築学、保健、人文学・言語学、音楽、科学・航空学、視覚・創造芸術学などのたくさんの学部を持つ国立大学である。群馬大学と協定はまだ結んでいないものの、先生同士の繋がりがあり、一昨年群馬大学を学生が訪れている。

3) 事前学習

事前学習として1人ずつ2つの発表資料を作った。1つ目はオーストラリアについて分担して調べ、オーストラリアやゴールドコースト、グリフィス大学、グリフィス大学看護学部、助産学部、看護制度、看護教育について、春休み中に研修メンバーの前で日本語で発表した。2つ目は研修中に現地で発表するために日本について分担して調べ、群馬県や群馬大学、日本の医療動向、日本の保険、介護制度、日本の看護などについて英語で発表する練習をした。



図1 今回の参加者

II 内容

1) 実施スケジュール

- 3月19日(月)成田空港出発
- 20日(火)ブリスベン空港到着→ゴールドコーストへ移動
- 21日(水)学内研修
- 22日(木)学内研修
- 23日(金)学内研修
- 24日(土)終日自由行動
- 25日(日)夕方まで自由行動→ブリスベンへ移動
- 26日(月)病院見学
- 27日(火)ブリスベン空港出発→成田空港到着



図2 校内見学の様子



図3 グリフィス大学の図書館

2) 学内研修内容

3日間あった学内研修では、グリフィス大学構内の設備の見学(図2、3)、看護学部1年生と2年生の講義への参加、英語での日本についての発表、現地の学生の実技練習の見学、ラボ見学などを行った。朝は9時前には登校し、施設見学や大学紹介の講義を受けた後、90分の授業に参加し、1時間の昼食休憩があった後、90分の授業を1つまたは2つ受けるという流れであった。看護学部では、倫理、コミュニケーション、病態生理、統計などの授業を現地の学生と一緒に英語で受け、特にオーストラリアの看護の特徴でもある「ベッドサイドハンドオーバー」について学んだ。そのほかにも事前学習で作った日本についての発表として、群馬県、群馬大学医学部保健学科看護学専攻、日本の看護師や医療制度、保険制度について紹介した。演習室やラボ見学では、現地の学生の演習の様子を見させてもらったり、実際に使われている機械を体験させてもらった。(図4)

3) 病院見学内容

最終日にブリスベンにあるPrincess Alexandra Hospital(以下PAH)へオーストラリアでの看護の実地を見学に行った。その病院では、以前群馬大学を訪れたことがある方が働いており、PAHの説明、ICU、整形外科、脳損傷リハビリテーションについて案内をしてもらった。PAHは1901年8月5日に慢性疾患のための病院として設立され、現在は精神疾患や救急など幅広く対応している。PAHはマグネットホスピタルの一つであり、マグネットホスピタルとは「患者・医師・看護師を磁石のように引きつけて放さない、魅力ある病院」という意味で、1994年に米国看護師認定センター(ANCC)によって開発され、マグネットホスピタルであるためには4年ごとに厳しい基準をクリアするための評価を受ける必要がある。ICUでは日本人の方が働いており、日本語でICUについて説明をしてもらった。(図5、6)また、ICU内にミニICUと呼ばれているシュミレーションルームがあり、そこでの研修に合格できないとICUで働けない仕組みになっているようであった。(図7)



図4 演習室にて

III 結果

1) 考察

学内研修を通して気づいたことが3つあった。1つ目は現地の学生の学習への意識の高さである。授業は基本的に2人から10人程度の少人数クラスで行われていたが、すべての授業が先生が話していることを聞くだけの受動的な授業ではなく、先生と生徒のコミュニケーションが活発で、お互いに質問しあいながら授業が進んでいくというものであった。生徒は少しでも気になることがあると授業を止め先生に質問をしてその場で解決をし、先生の問題の投げかけに対してはしっかりと自分の考えを発表できていた。もちろんそのように授業が進むので寝ている生徒はおらず、自分の学習したいことに対して授業時間を有効に使って学習していることが伝わってきた。

2つ目は大学生活の日本との違いである。1つは授業へのパソコンの持ち込みである。現地の生徒全員がパソコンを持参しており、わからないことがあればその場で調べたり、文献を見たり、授業を進める資料を見たりしていた。日本では授業中にパソコンを使ったり携帯を使って調べることがあまり良いこととされていないが、気になる疑問を放っておかないでその場で解決でき、効率の良い授業展開ができることがとてもいいと思った。また、カフェテリアや図書館が充実していることもあげられる。学内であるのにバーがあったりその一角にはビリヤードができたり、ベジタリアンフードや世界各国の料理があったり、授業がない時間をとても充実して過ごせる設備がそろっていた。授業を集中して受ける分、ランチタイムなどはテラス席で友達同士で楽しく食事している様子が見られ、メリハリがきちんとされていると感じた。図書館では日本と違って飲食や会話が禁止されていなくて、自由にグループワークをできたり、ゲームが置いてあるコーナーがあって気分転換ができているようであった。しかし、勉強に集中したい人もいるのでその人のために2階を会話禁止にするというような工夫があり、日本でもそうなれば集中するときは集中して、気分転換するときはする、といったように効率の良い学習ができるのではないかなと思った。

3つ目は学生の看護技術を上げるための設備が揃っていることであった。実際に自分たちも体験させてもらったが、演習のための道具は制限なく使うことができたり、実際に病院で使われている高度な機械が多く大学内にあった。例えば心肺蘇生の練習をする人形があり、その人形がモニターとつながっていて正しい方法で行われているかを映し出してくれたり、看護師の職業病である腰痛予防のために患者を持ち上げ移動をサポートしてくれるような機械があり、とても高度な教育を受けていることが伝わった。

PAHの病院見学では、3つの領域について見学して話を聞くことができたが、日本との具体的な違いも先輩や先生に聞きながら回ることができた。医療水準が高いことはもちろん、福利厚生がしっかりしていることも分かった。日本より休日が多く看護師1人1人の負担が少ないうえに給料がいいこと、また質のいい看護を提供するために看護師のことを大切にしている、大学の演習室で見たような機械を使って職業病の回避に努めていることなどを知り、やはり職場環境の良さはいい看護観を育てるのに必要であると感じた。

2) 総括と今後への展望

約1週間オーストラリアの大学生活と看護について触れ、様々な日本との違いを知ることができた。オーストラリアと日本では学校や病院での決まりごとが異なるので、それぞれにいい点悪い点があると思うが、実際に見て体験したからこそ、日本に持ち込みたいと思ったり、オーストラリアで働きたいと思うことが多かった。今回の研修の中で特によかったと思ったのが現地で働く日本人の方に出会えたことであった。将来ぼんやりと海外で働きたいとは考えていたけど、実際にそうしている人に出会ったのは初めてだったので、なぜ日本を出ようと思ったか、どのようにしてオーストラリアで働くようになったかを質問することができて、自分の将来を広げることができた。また、日本を出て常に日本との違いを感じながら生活したからこそ、いかに自分が看護の知識が不足しているかを思い知った。すでに日本で習っているはずの座学を忘れていて、英語で授業を受ける上に専門用語はかりで理解ができなかった授業もあった。日本語での知識がもっとあればもう少し簡単に理解ができたかと思うと悔しかった。また今回は一つ上の学年の先輩たちと一緒に研修を受け、その先輩方は半年間の領域別実習を終え知識が多く備わっていたのでたくさんのことを日本語でも教えて頂いた。1年後自分もこうなるためにこれからの2年間は今までよりもっと命を預かっているという自覚をもって、現地で出会った学生たちのようにメリハリをつけて責任感を持って勉学に励みたいと思った。



図5 PAHのICU見学後



図6 ICUで働く日本人の方



図7 シュミレーションルームにて